

台湾茶の歴史を訪ねる 第十七回

(17) 初期台湾茶業に貢献した日本人
～藤江勝太郎と可徳乾三（3）

須賀 努（コラムニスト／茶旅人）

これまで明治期の茶業における2人のダイナミックな男の生涯を見てきた。今回は可徳の生まれ故郷である熊本及び彼が活躍したウラジオストク、そして終焉の地、台湾桃園を旅した様子を紹介してみたい（尚今回はその配分上、台湾以外の内容が多く含まれているが、これも可徳を知る上で重要なことなので、ご容赦頂きたい）。

可徳の故郷 熊本県合志市

博多バスターミナルから熊本県合志市へ向かう。正直地理は全く頭に入っておらず、ただ言われた通りのバスに乗ることだけに集中した。熊本行きのバスは20分に一本程度あり、相当に速い。因みに合志は『こうし』と読み、バス停の地名は西合志（にしこうし）と読むらしい。なぜだろうか。1時間後、高速道路に設置されたバス停で降りたのは筆者だけだった。こんなところに一人で放置されたらどうなるのだろうか。

合志市市議会議員の上田欣也さんの出迎えを受け、車で向かった先は、何とその可徳乾三のお墓がある墓地だった。可徳はここ合志の生まれであ

り、上田さんも世に知られていない合志の偉人として、可徳の業績をもう少し広めようと活動を始めていた。お墓は以前と変わっていたようだが、これも熊本地震の影響ではないかという。

これまで色々と調べてはきたが、古い墓石に可徳乾三の名前を見て、初めて『この人は本当に生きていたのだ』との実感が沸いた。遺骨は誰かが台湾から持ち帰ったのだろうか。更には震災後に建てられた真新しい墓石の方にも彼の名前はあった。この新しいお墓群、まさに圧巻だった。『可徳家』と書かれた墓石がズラッと立ち並んでいた。正直これまで可徳、という苗字さえ、目にしたことはなかったのに、この街にはこんなに可徳姓が多いのか、と改めて可徳乾三の故郷に来たことに思いを致す。

それから合志義塾の跡に向かった。合志義塾は明治25年、農村で教育機会のない若者のために作られた私塾で、当時として珍しい男女共学などユニークな教育方針を掲げ、60年間で約6500人が卒業したという。主催者には可徳の親戚もあり、可徳の活動に深くかかわった者もいた。入口に碑があるほか、今は牛小屋になっている建物が、教室として使われていたという。その庭にはやはり熊本出身の徳富蘇峰からもらった（同志社の新島襄から徳富がもらった）というカタルパの木が今も育っている。



熊本県合志 可徳乾三の墓



熊本県合志 合志義塾跡

可徳が九州で紅茶作りを行い、その茶葉を売り歩き、更にはシベリアで茶業を行うにあたり、この塾を出た若者たちが何人も関わっていた（村田勇喜、岩木豊太、溝口勲他1名）ことは既に述べた。なぜ可徳乾三という男がこの地から世界に飛び出していったのか、そのあたりを垣間見られる農村風景がそこにあった。ここでは作物があまり育たないという。外に出て行かなければ、食べていけない、可徳やこの地の若者を突き動かしたのは、そのような経済事情であったようだ。熊本で教育者として名高かった佐々友房（孫は警察官僚の佐々淳行）によれば『（可徳は）事業をなさんとせば、先ず人を造らざるべからずとの主張を有す』とあり、教育者との側面も見られる。

後述するウラジオストク、ハバロフスクに行っても、そこで生きた日本人には九州出身者が多い。台湾ならまだ地理的に分からないでもないが、第2次大戦前にこれらの地域にも多くの人々が出ていった事情は、九州の歴史を学んでいくと少しずつ理解できるようになる。

それにしても、九州から日本全国、そしてシベリア、台湾と渡り歩く、こんなダイナミックな人生を送った茶業者が明治期にいたことは実に驚きであり、もっと世に知られるべきだと、調べれば調べるほど益々思う。そしてその人物の背景につ

いても更に学ぶ必要があると痛感する。

尚、先日再度熊本を訪問した際、数人の方から『阿倍野利恭』の名を聞いた。地元では可徳は知られていないが、阿倍野は有名だという。前回『可徳はウラジオストク出張所に阿倍野利恭を支配人として置いて活動した』と既にかいたが、阿倍野は『農商務省の練習生、朝日新聞の通信員、そして熊本茶業組合出張員の資格で細々と紅茶輸出の仕事もしていた』と、同じ熊本市出身でシベリア探索要員であった石光真清が『曠野の花』の中で書き記している人物である。また『阿部野は可徳商会の茶の輸出商人』と名乗って、現地の情報収集も行って石光と行動を共にする場面さえある。単なる茶業出張所の支配人であるはずはない。

その阿倍野は1942年、郷里に東洋語学専門学校（現熊本学園大学）を創設して、初代校長となり、ロシア語などの教育にも努めたという。地元では『ロシア人が来た時、阿部野さんは勿論、数人の熊本人がロシア語で会話していたとの逸話がある。こんな田舎でロシア語とは』と語られ、熊本とロシアの繋がりを示している。

熊本の三友堂茶店

可徳は、1887年（1889年との説もあり）熊本市上通町に三友堂という茶舗を設立している。三友というぐらだから、可徳、江崎四郎、川村競の三人の友で作った店である。この店が現在も三友堂茶舗として営業しているというので、訪ねてみた。5代目の工藤玄さん夫妻が温かく迎えてくれたが、店舗は熊本地震の影響で仮店舗になっていた。すぐ傍には、可徳の死後、百か日及び七回忌の法要が営まれたという見性寺が見え、可徳ゆかりの場所であるとの感覚が芽生える。

三友堂は可徳乾三が経営に携わっていた頃、『紅茶、磚茶、団茶』を扱っていたらしい。国内勸業博覧会で一等賞を受賞した時の看板にはそのよう



熊本県熊本 三友堂



三友堂 1934年の写真

にあり、また英語は『Black & Brick Tea』となっているが、磚茶と団茶の区別は不明である。この看板は現存するが傷みが激しく、今回見ることは出来なかった。

ただ可徳がシベリアでの事業に失敗して台湾に行く際、三友堂は店員だった工藤功に引き継がれた。工藤も西合志の生まれで、合志義塾出身、一生独身だった。豪胆な一面も見られたようだが、何事にも熱心で、自らの事業だけではなく、熊本茶業界の発展にも尽力したという。1934年に撮影されたという店舗の写真を見ると、相当な身代で看板に『工藤三友堂』や『自園紅茶』などに見える。

3代目工藤巖は功の従兄。やはり合志義塾を出て、三友堂で修行した。字がとてもうまかったという。ただ戦時下で思うような業務は出来ず、無理が祟ってか35歳で早世した。今の当主、玄さんの父であるが『ゼロ歳の時に亡くなったので全く記憶はない』と。ここまでは合志義塾関係者であり、可徳との繋がりも垣間見られる。

4代目の工藤末男は、人吉出身で三友堂の番頭をしており、当主の急逝で店を引き継いだ。人吉出身とは、山茶の産地だからそちらの関係だろうか。1953年の熊本大洪水で、三友堂の倉庫にあった茶葉も水没。当時の店と土地を売り払い、茶農

家への支払いに充て、店舗は移転して小さくなった。そして先日熊本地震にも襲われる。

民族学者の宮本常一は、『私の日本地図 阿蘇球磨』の中で、『団茶なら可徳商会（三友堂のこと）という茶商がいて、それが満州やシベリアに輸出していたという話』や『可徳商会は私も10年ほど前に訪ねたことがある』などと記しており、『秘境の内の秘境の五家荘の山中の茶が熊本で団茶や磚茶に製せられ、明治の中頃にはもうシベリアまで売り広められていた』のは不思議だと書いている。この地方で戦前の可徳の貢献、評価がどの程度であったかを推し量れる内容だ。

ハバロフスクの可徳商店

成田空港から僅か2時間半のフライトで、極東ロシア、ハバロフスクに着いてしまうとは、正直全く想像できなかった。ハバロフスク、と言われても、遠い遠い所だと思い込んでいた。ところが台北に行くより遥かに近いのである。しかも近年ロシアビザも緩和され、ハバロフスクに短期滞在するだけなら、簡単な申請で、無料で電子ビザが取れてしまう。実はロシアはすぐそこにあっただ。

120年前、可徳乾三がハバロフスクに渡った時は、近いと感じただろうか。長崎から船に乗り、

ウラジオストクから開通したばかりのシベリア鉄道に揺られて行ったのだろうか。当時のハバロフスクはシベリアの中心都市として、栄えていた。今回訪ねてみても、100年以上前に建てられたレンガ造りの立派な建物が数多く残っており、往時の繁栄を忍ばせる。

ハバロフスクには九州の熊本、長崎辺りから渡って来た商売人がたくさんおり、当時の九州、特に熊本・長崎の経済状況が垣間見られる。熊本合志出身の可徳乾三もその一人だったということだ。当時海外に働きに行くことに今ほど抵抗がなかったようで、熊本市内では大正から昭和にかけて、前述の阿倍野のロシア語同様、街中で中国人と普通に中国語を話している熊本県人がよく見られた、との話もある。

全くの余談になるが、先日阿蘇で名物の田楽の店に入り、おかみさんと雑談していると、『実はうちの主人も台湾生まれ（湾生）で戦後引き揚げてきました。その両親は花蓮で木材の運搬業をしていたと聞いています。この辺りには台湾で働いて戦後戻った人が何人もいました』というから、中国語や台湾語が話せる人がいても何ら不思議ではなく、ある意味で今よりはるかにグローバルであったと言えるかもしれない。

また台湾が日本領となった当初、まずは治安維持のため多くの警察官を必要としたが、その多くが熊本など九州で募集され、台湾に渡ったという歴史もある。現在、日月潭紅茶に最初に投資した日本人について調べているが、その内の一人は、その時期に通訳館として熊本より渡った持木壯造であり、恐らく彼も最初の募集に応じたものと思われる。持木の台湾での茶業については後日報告したいと考えている。

その可徳が営んだ可徳商店はどこにあったのか。正直ロシア語が話せず、読むこともできない筆者にとっては、ロシアでの歴史調査には高いハードルがあると思っていたが、吉報が寄せられ

ていた。知人を介して、現地在住のロシア人、ウラジミール・ポボロツキーさんより『可徳商店のあった場所に案内できます』とのメッセージを日本語で受け取ったのだ。

訪ねてみると、ポボロツキーさんは大学時代に日本語を専攻し、ロシアの国営旅行会社インツーリストに30年以上勤めており、日本人相手のツアーガイド経験も豊富な人物だった。当時日本から来る客に観光目的は少なく、シベリア抑留者や戦前ここに住んでいた日本人、またその子孫が訪



ロシア ハバロフスク 可徳商店跡



ハバロフスク 可徳商店の広告

ねてくることが多く、元々歴史好きだった彼は、日本人居留民の歴史などの勉強を積み重ね、詳細な日本人マップを作り上げていた。

『アムルスカヤ街6番地（現ムラビヨフ・アムルスキー通り8番地）のクラサコーフ所有の屋敷』、そこが、1899年に開業した可徳商店の場所だった。アムール川に近い、メインストリートの一角にあった。当時この付近には日本人経営の商店がいくつもあったが、可徳商店は絶好の位置を占めていたとみられる。残念ながらその木造の建物は、可徳が去った1904年以降すぐに壊され、後には1910年代に建てられたと思われるレンガ造りの2階建てが今もしっかりと残っていた。

僅か5年で幕を閉じた可徳商店に関する資料はハバロフスクにはほぼ残されていない。商店の主任は西峰次。西は日露戦争後もこの地に舞い戻って、引き続き商売をしていたことは分かっており、やはり可徳商店自体は、日露戦争でその役割を終えてしまったのか、または西が事業を引き継いだのか、この辺は残念ながら不明だ。

因みに西峰次は熊本県球磨郡出身で、1898年茶業界中央会議所がウラジオストク出張所を作った時に、事務員として渡って来て、翌年可徳商店の開業でハバロフスクに移り、1904年の日露開戦で一時帰国、ロシア語通訳として旅順、奉天戦役に従軍。1906年にはウラジオストクに舞い戻り、紅磚茶の輸入を行っている。ロシア革命後の1922年にシベリアを離れるまで、20年の歳月を過ごしていたようだが、その実態が分かってくると、更に面白い。

ウラジオストク出張所

その後ウラジオストクにも行って見た。極東のこじんまりした港町で、シベリア鉄道の東の出发点でもあり、日本人にもなじみがある。19世紀後半から20世紀前半、ここはハバロフスク以上に日本人が進出して、多くの商店が事務所を構えてい

た。今歩いてみても、100年以上前の建物がいくつも見られ、現役で使われているものも多い。

可徳が設立した茶業組合中央会議所ウラジオストク出張所は一体どこにあったのだろうか。ハバロフスクでお世話になったポボロツキーさんの調査によれば、『アレウーツカヤ街36番地 カリオポリ商館という2階建ての賃貸物件』と『スヴェトランスカヤ街9番地』の2つの場所にあった可能性があるという。

実際ウラジオストクでこの2つの場所へ行ってみると、アレウーツカヤ街の方は、近代的なショッピングセンター「Clover House」に既に建て替え



ロシア ウラジオストク アレウーツカヤ街
茶業組合中央会議所ウラジオストク出張所跡



ウラジオストク スヴェトランスカヤ街 九州製茶跡



ウラジオストク ゴーヤ・モルゲンさんと

られており、当時の建物は残っていなかったが、その周辺には日本総領事館、各銀行、日本人商店なども多くあった地区であり、可徳はここに出張所を開設したのではないかと、と何となく思える場所であった。

もう一つのスヴェトランスカヤ街9番地もそこから歩いて10分以内の場所にあった。こちらは建物がそのまま残されているが、9番地には2つの建物が建っており、どちらに入居していたのかを判断することは難しい。現在1階には革製品を扱うブランドショップなどが入っており、その裏を抜けると、噴水通りとして名高い、アドミラーラ・フォーキナ通りに出る。現在は市民や観光客



台湾 現在の埔心駅前

の憩いの場となっているが、実は100年前は日本人経営の女郎屋が立ち並んでいた、との話もあり、歴史の複雑さを感じた。

可徳はなぜウラジオストクで事務所を移ったのだろうか。その答えは茶業組合がウラジオストクのビジネスを、九州製茶輸出株式会社に全て委託したことによるのではないと思われる。可徳はこの会社の取締役として、引き続き関与しているが、茶の輸入業務の主力はハバロフスクの可徳商店になっていったのかもしれない。

因みに日口交流史が専門で、極東連邦大学で日本語を教えているゴーヤ・モルゲンさんの著書、『ウラジオストク 日本人居留民の歴史 1860~1937年』の中には、九州製茶という企業についての記述があり、興味深い。この会社は長崎出身の山口修造という人が興したとあるが、この人物と可徳の関係、九州製茶という会社の具体的な内容などについては、モルゲンさんも分からない（子孫よりの手紙を基に記述しているため）とのことだった。

だがこの2つは社名が酷似しており、同じ会社である可能性は否定できず、山口の事務所がスヴェトランスカヤ街9番地に所在していたようなので、業務がそこに引き継がれた、と推測するのは如何だろうか。九州製茶も日露戦争後に茶業を止め、山口親子も資産を失い、帰国したとされている。この辺の具体的な内容が分かれば、もう少し可徳のウラジオストクでの活動が明確になると思うのだが、120年前の歴史を辿るのはやはり容易ではない。

可徳終焉の地

台北から台湾鉄道の区間車（各駅停車）に揺られて1時間。現在ものどかな田舎駅の様子を持つ埔心駅に、可徳の足跡を訪ねて行ったこともある。駅前には長年続く薬局や漢方医の診療所なども存在していたが、近所で聞いてみても、誰も『100年

前にこの地で茶荘を開いていた日本人』について知る人はなく、梅花園茶舗の存在は完全に消えていた。

この駅から歩いて20分も行けば、現在の茶業改良場がある。日本台湾茶という会社はもう少し駅に近い所にあっただらしい。可徳は引退後も、時には試験場や会社に顔を出し、後輩の指導をしたのだろうか。それとも自分の好きな茶を小さな茶舗で作って、出来が良ければ喜んでいただろうか。

現時点では可徳乾三の末裔がその後どうしていたのか、などの情報は殆どない。可徳には三人の娘（梅子、花子、園子）がいた、との話もあり、店舗名はこの三人から梅花園茶舗と名付けられたと言うがどうだろうか。戦後孫が熊本に来て、合志義塾の生徒になったともいうが、可徳乾三自身と共に、今や詳細は歴史に埋もれてしまって分からない。